



トヨタ看護専 学校だより

発行
トヨタ自動車株式会社
トヨタ看護専門学校
発行人 稲垣春夫
編集人 鎌田浩也



自主研修旅行で学んだこと

2学年（29期生）

吉岐菜南美

私達、第29期生全員で考え企画し、楽しみにしていた自主研修旅行。その旅行に平成28年10月5日から10月7日の3泊4日をかけ、災害医療や災害看護について学び東海大地震に備えた知識を身につける目的で、兵庫県及び大阪府に行ってきました。その学びを深めるため、

私達は事前に災害の種類、災害看護として想定したトリアージ、応急処置、そして看護師と看護学生が災害現場で出来ること、限られた物資、医材を使ってどう看護するのか等についてシミュレーションして臨みました。

旅行の初日、兵庫県全域に何十年かに一度の大きな台風の影響で暴風警報が出てしまい予定していた「日本赤十字社兵庫県支部」、「人と防災未来センター」での

研修は取り止めとなつてしまいました。残念な思いを引きずりながら宿泊先のホテルで、事前に校内で用意した資料や調べ学習を揃え、グループワークを行い、その成果発表によって今回の一つ目の目的を補いました。発表では、ボランティアの種類や参加方法、災害時の状況把握の仕方、老人や子供への看護、精神面への看護などについて掘り下げた意見交換をしました。



全グループの発表を通して互いに学んだことは、被災された方々に対して私達がやりたい援助を行うのではなく、被災者が望んでいる、相手のニーズを満たす看護が重要であるという理解です。ここで重要となった『相手が望んでいる看護』とは、非常、定常を問わず対象の立場になって看護を行うことだと思いました。また、相手のことを理解しようとしているのが感じられるような関わり方や、心のケアができるコミュニケーション能力が基本となっていることが分かりました。子供に対しては相手の立場に立ち、対象を理解するには、発達課題などの基本的知識が必要であることが分かりました。つまり私達がこれまで、そして今、学内で勉強して

いる全てのが災害看護につながっていると理解しました。更に、精神的ケアにおいては、災害特有と捉えるのではなく、対象の背景を把握する実習での積み重ねが自分の実力となり、災害時での精神的ケアにおいても活用出来ると思えました。災害であっても看護の基本は同じであると理解し、これからの日々の学びを意識して生かし、学生生活や勉強、看護技術の習得など、今やるべき事をしっかりと行うことが災害医療・災害看護に対する備えとして私達が出来ることだと思えました。

旅行を通じて私が強く印象に残った事があります。それは、自主研修旅行委員のリーダーを務め、チームのまとめについて考えたことです。集団行動において重

要なことは一人ひとりの協力がとても大切だということ。私は、リーダー経験があまりなく、その役割から旅行中はとても緊張していました。委員全員で準備したものが成功するの、クラスのみんなに喜んでもらえるのか考えると当日までも不安でした。しかし、蓋を開けて見るとクラスのメンバーは、よく指示を聞いてもらえ一度も集合時間に遅れることはありませんでした。一日目は台風の影響でスケジュールの変更となりましたが、全員揃って無事に帰ってくる事ができました。その理由の一つは先生方や旅行会社の方、添乗員さんとのコミュニケーションとして大切な「ホウレンソウ（報連相）」の励行です。ホウレンソウとは、

報告・連絡・相談の頭文字を並べた標語です。今回「ホウレンソウ」の大切さを再認識しました。私達は現在、29期生というチームやトヨタ看護専門学校というチームで活動しています。実習では、トヨタ記念病院のチームの一員として学ばせていただいています。「ホウレンソウ」の目的は、状況の共有だと思います。病院では患者さんの情報を引き継ぐという目的もあると思います。看護師は各々、患者さんの一番身近なベッドサイドに寄り添い、昼も夜も気を配っています。そうする事で、患者さんのさまざまな情報をいち早く入手することができます。各担当それぞれが得た情報を、わかりやすく看護チームや担当医に伝え、迅速かつ均質な看護をす

ることが、患者さんの安心感や信頼にもつながると思います。反対に、情報共有が不十分だった場合、重大な問題に発展する可能性があると思います。患者さんの安全を守り、その時々で最適な治療を受けられる環境を作るという意味で、情報共有は大切であると思いました。

今回、自主研修旅行を無事に終える事が出来たのは、自分の勉強を進めながら旅行の準備も頑張った委員、クラスの皆、そして家族、引率してくださった先生方、旅行会社の方、学校で心配していただいた先生方、全ての人の支えのおかげで、と思っています。そして、大きな収穫として互いの協力が何より大切だという学びを今後の学生生活にも生かして行きたいと思っています。



平成28年11月25日、私たち第30期生は、待ちに待った名古屋、劇団四季の劇場へ芸術鑑賞に行きました。

今回鑑賞するミュージカルは、あの人魚姫、ディズニーの名作「リトルマーメイド」。劇団四季の劇場も新装され、そのオーブニングを飾る



劇団四季ミュージカル
「リトルマーメイド」を鑑賞して
1学年（第30期生） 谷口由菜

作品です。クラスの中にはミュージカルを観たことがない学生が多く、私も初めてのミュージカル鑑賞が楽しみで、この日が来るのを心待ちにしています。

新装された名古屋劇場は、青と黄色。階段様の建物でもモダンに感じました。中に入り席に着くと、想像していたよりも舞台が近く感じ、こんなにも近くで観られるというワクワクした気持ちで一杯になって始まる前から感動してしまいました。後で知ったのですが、一階の最後列から舞台までは20メートルしかないそうです。さて開演です。



リトルマーメイドの主人公、人魚のアリエルは七人娘の末娘で、とても好奇心旺盛な女の子、いつも地上の世界に憧れていました。ある日、好奇心が抑えられず航海中の船に近づき、人間の王子エリックを見つけて一目で恋に落ちてしまいます。そのエリックを乗せた船が嵐に襲われ愛犬を助けようと海に落ち、朦朧となっていたエリックを、歌を口ずさみながら介抱し、ここで聴いた歌声が忘れられず王子エリックは、アリエルに惹かれていきます。そして、それからずっとアリエルもエリックともう一度会いたいと思っています。

そのためにアリエルは、父王トリトンの反対も聞かず、その想いを利用しようと海の魔女アースラとある契約を結

びます。それは、アリエルの美しい歌声と引きかえに三日間人間の姿にし、エリックに遭わせキスを交わす無理な賭けを持ち掛け、国を奪おうとした企みでした。

私は、このミュージカルを見て、アリエルは少しわがままですが、行動力があり前向きな考え方ができる人だと感じました。アリエルの年齢を調べてみると、私と同じ年代の18歳で共感できました。アリエルが望んだ地上の世界に行き、憧れのエリックが探し求めているのは自分だと、声に出せない中で、必死にアピールする姿からも、一途に思ったことをやり遂げる人なのだと感じました。今まで過ごしてきた海の中から離れ、人間の世界で生きていこうと覚悟をした行動力のすばらしさ

や、前向きな気持ちに圧倒されました。

私は、何か困難なことに接すると前向きに考えられないことがあります。アリエルのような行動力は、どうしたら養う事が出来るのか、どうしたらそのような考え方が出来るようになるのかを、この劇を観て考えさせられ、同時に若い娘の一途な気持ちを心配する父親の気持ちも理解しました。また、作品の中で、仲間からの助けや家族から想いについて印象に残りました。手に入れた人間の足をうまく使えないアリエルを上げます友達や、危険な海の上へ行ってはいけなくと最愛の末娘に何度も言う父トリトンに、アリエルを心配する気持ちが伝わってきました。アリエルが何をすることも仲間や家族

の支えがあったのだと思ひ、仲間の大切さ家族の大切さを改めて感じました。私もこれから今の自分の周りで励まし合える友人や支えてくれる家族がいるということに感謝をし、看護師になるといふ夢に向かって歩いていきたいと思ひます。





「クリスマスキャロル」に参加して
1 学年（第 30 期生） 近藤 陽



平成 28 年 12 月 15 日、病院恒例のクリスマスキャロル。私は、事前に参加をお願いし聖歌隊の一員に加わることが出来ました。

当日は、中学生や看護学生、看護師の方々 50 人程、全員が、キャンドルを手にし、その灯火に照らされ、聖歌を合唱しながら、ゆっくると病棟を

巡る。そこは、とても神秘的で厳かな空間に包まれていました。



わざわざ病室の扉に立って顔を覗かせて下さった患者さんの笑顔、ベッドから体を起こし、歌に合わせて嬉しそうに左右に体を動かしながら、私達に向けて手拍子して下さった患者さんの笑顔、大きく手を振ってくれた小さな子供たちの楽しそうな笑顔。私が直接ケアをさせて頂いたわけでもありません。けれども患者さんの笑顔が、私達に心からの「ありがとう」を投げかけてくれているように感じました。その全て

の笑顔から心が伝わり、とても温かい気持ちにさせて頂きました。そして今まで感じ取ることが出来なかった患者さんとの心穏やかで温かい空間、時間を共有させて頂きました。そして、看護師を目指す私にとって患者さんやご家族に寄り添い「優しさ」「温もりを伝えること」が大切であり、課題であり、私の看護師像であるかを、あらためて深く心に刻む貴重な時間を頂くことが出来ました。

これからも、この感動を忘れずに、看護において技術だけではなく、心のつながりの重要性を意識しながら、患者さんに心も体も笑顔になって頂けるように、課題に取り組み、私自身が目指す看護に向けて、知識や技術を修得していきたいと思えます。



教科外活動
「特別講演会」を聴いて
2 学年（第 29 期生） 北澤 瞳



平成 28 年 12 月 20 日、教科外活動の一環として、佐藤泰子先生をお迎えし、「バカボンパパに学ぶ苦悩の人間学」どうにもならないことをどうにかする」のテーマの講演を聴講させていただきました。佐藤先生は、京都大学で精神医学を基本に人の苦悩について研究されている

このことで、看護学生としてケアに役立つのではと、楽しみにしていました。先生の講演は、始まりから最後まで途切れることの無い言葉（関西弁）のシャワーで、心に残る印象的なお話がたくさんありました。

まず、「情報をコントロールしているのは聴き手である」というお話があり、自分自身に置き換え、話し手になった時を振り返ってみると、確かに聴き手の態度次第で話し手側が伝えようとしている内容や脈絡を無意識のうちに変えていることがあると感じました。その事は、話す事の質にも影響し、聴き手の態度が大切であることを改めて確認することができ、今後話を聴くときはその事を意識し、良い聴き手になりたいと思えました。

次に印象に残った話として人は、「苦しい事柄に対して①ノーという思いが生まれ、次に、理想(苦しいことを解決しよう)に近づこうように②事柄を動かそうとする。しかし、苦しい事柄自体を変えるのが困難でどうにもならない時、③ノーという思いをイエスに変える必要がある。」というお話がありました。そして、その思いを変えるのは本人でなければならぬと言われました。



私はこのお話を聞いて、これから卒業までの間の臨地実習のことを考え、自分自身が苦しい

事柄に出会う事、苦しんでいる患者さんに出会う事等困難な事に対峙する時に、先生や友達の手を借りるなどして、自分自身で困難という思いを変え、苦しみを緩和する方向に動けるようになりたいと思いました。また、患者さんに対して、なぜ苦しいのか、何が受け入れられないのかを、自分の価値の押しつけにならないよう患者さんの思いを傾聴し、その全てを受け止めていきたいです。

「向き合うというのは、力の大きい人、声の大きい人がいかに合わせてくれるか」と先生が言われていたのが印象に残っています。「寄り添いたい」「向き合いたい」と、言葉で言うのは簡単ですが、実際に寄るの添い、向き合うことは簡単なことではありません。だ

からと言って、関わらなかったり、反対に、何かしなければと焦ったりするのはなく、一生懸命相手のことを考え、その気持ちのままそばにいたことが大切だと感じました。他者を100%理解することは出来ないけれど、本人が思いを表出し、思いの変化につながり、苦しみを軽減出来るように一生懸命考え、寄り添い向き合っていきたいです。



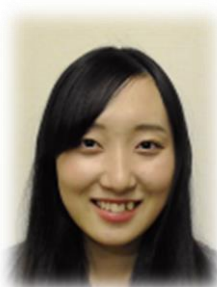
先生のお話から、人の苦しみと言葉との関係や、寄るの添い向き合う事の本当の意味、良い聴き手となる事などを学び、これからの看護実習に生かしていきたいです。



「看護」に対する想い

3学年(第29期生)

中根彩花



これまでの学習や臨地実習を通して生活背景や人生観、そして病識など様々な患者さんと関わらせていただいた。一年生の頃は患者さんとの接し方、看護を行う前のアプローチの難しさ、多様なコミュニケーションの取り方など基本の大切さを実感した。そして、その後実習で様々な経験を積み重ねていくうちに、患者さんに対する声かけや援助の方法など、常に具体

的な根拠をしっかりと自分の中で持ちながら関わり、表現していくことによって、患者さんも心を開いてくださった。また、援助を通して日常生活動作が少しずつ向上していく様子を成果として理解でき、看護の大切さや奥深さ、そして喜びも同時に学び取ることができた。

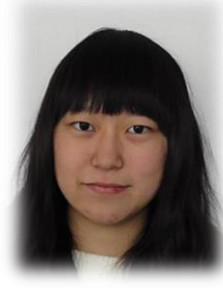
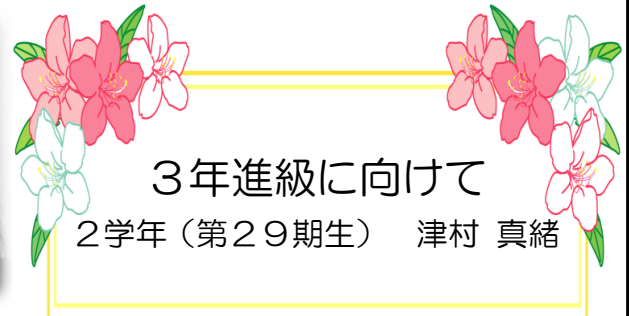
看護学校三年間のまとめとして最後に行った統合実習では、様々な職種の方と情報共有しながら実際の看護を行っていくことの重みと大切さを学んだ。これまでの実習で患者さんの退院を見据えてどのような介入が必要かを考

えながら看護を進めていくことの大切さを理解しているつもりであったが、常にその視点を持ちながら患者さんと関わる事ができていないと反省している。他の医療職とは違い、患者さんと最も多く接することができるのは看護師であり、日々の援助を行うだけではなく、看護師としての関わりが深さが患者さんの治療経過に大きく影響し、その目線で患者さんと家族を看ながら退院に向け患者さんに合う介入方法を工夫し、考えていくことが大切だと学んだ。

実習が始まった頃は、患者さんとのコミュニケーションや援助で一杯になってしまっていた自分がいた。その時がスタートであったと思えば、これから看護師として働いていく上で、

患者さんの傍に寄り添い、共有すべき内容の全てを汲み取った上で退院後を見据えた看護を目指していききたいと思った。

コミュニケーションは、看護に関わらず人間関係を構築する上で大切なスキルである。そのため、様々な年代や疾患に合わせ、自分のコミュニケーション方法も変化させ、対応していかねければいけない。言葉としくさや表情からも相手の感情が読み取れる。目線をしっかりと合わせ、様子を捉える方法は様々なでその表出が大切なことも学んだ。患者さん自身の気持ちを表出しやすいように、雰囲気作りや接し方を心がけ、対象を尊重し、誠実な態度によって、目指す看護師として今後毎日学んでいきたい。



3年進級に向けて
2学年(第29期生) 津村 真緒

もとに、日々練習に励んできました。二月には初めの実習があり、学んで来たことが生かせるのかと心配し、とても緊張したことを覚えていきます。初めて患者さんを受け持たせて頂き、日常生活援助を中心に実施してきました。直ぐには上手くいきませんでした。声かけを行っていただくことや、時間を意識して行動することの大切さ、また安全面を意識して援助を行うことの重要性について学ぶことができました。

入学してから二年が経ち、この二年間で多くのことを学んできました。一年次には解剖生理学から、身体の構造や機能について学習することで、疾患や病態の理解に繋げ、また基礎的な看護技術についても、先生方からの指導や助言を

方から具体的な指導やあるべき姿への助言を頂きながら、実習に取り組みました。学んで来たことを踏まえた看護過程の展開を行ったことで、対象となった患者さんについて疾病の理解と共に、寄り添い向き合いながら理解を深めることができ、患者さんが望む看護に繋がっていくことが徐々に出来てきたと思います。

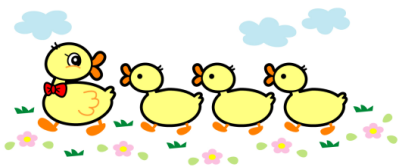
そして、これまでの集大成として三年次からは、領域実習や国家試験に向けての学習が本格的に始まります。三段跳びのジャンプを自分には乗り越えることができるのか、とても不安な気持ちでいっぱいですが、学んで来たことを一つずつ自分のものにして、経験として活かしていきたいながら、共にこれまで歩んで来たグループメ

ンパーと励まし合い協力し、取り組んでいきたいと思えます。そして、これまで経験したことのない技術については、積極的に学び取る姿勢を持ち、またその技術を含め、振り返りを繰り返すことで、技術の向上に努めていきたいと思えます。知識についても不足している部分を早く見定め、文献等活用しながら学びを深め克服していこうと思えます。また、時間の使い方について不得意なため、もう一度見直し、時間の有効活用ができるよう分析し、目標を定めながら計画的に取り組んでいきたいです。学びへの姿勢として、自分の行動や言葉に責任を持ち、協調性をもって、実習に取り組むことを目標とし進んでいこうと思えます。

そして、最後の仕上げ

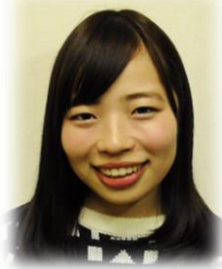
としての国家試験合格に向け、復習の繰り返し、真剣な模試への取り組みと、重ねた模試の振り返りを行い、自分の苦手な部分を把握し、底上げをしながら重点的に、学びを深めていきたいです。

今後、一年間の実習での目標は、患者さん一人ひとりとのお会いを大切にし、受け持たせて頂けることに感謝しながら、向き合い、寄り添っていけるよう、常に関わりの方を考え、「コミュニケーション能力を磨いていき、人として成長できる看護師を目指します。



3年間を振り返り 卒業に向けて想うこと

3学年（第28期生） 五十里 佳奈



平成28年12月9日、全実習終了。残すところ「国家試験」のみとなった今、三年間を振り返ると本当に多くの人に支えられてきた様々な事が思い起こされます。入学してから毎日看護師になるための積み

重ねました。私は、幼い頃から看護師に憧れていた為、看護について学べるのが嬉しくてたまりませんでした。技術練習も看護師になった気分で毎日頑張ることができました。二年生の後半からは約一年間かけて専門領域実習に臨み、自分で行ったアセスメントをもとに患者さんに必要な個別性のある看護を導き出し実施してきました。実習を重ねるごとに、「看護」とはどういうことか少しずつわかるようになり、自分の行ってきた看護によって患者さんの状態が僅かでも改善傾向になった時、とても嬉しく、「看護って楽しいな」と思える瞬間でした。

しかし、振り返ると楽しいことばかりではなく、辛く苦しいこともたくさんありました。

毎日、多くの課題や記録に追われ、眠れない日が続いたり、休日でも記録をすすめるため余裕がない日が続いたりすると、たとえ大好きな看護を学ぶためであってもとても苦しく感じる時がありました。また、実習で行き詰ってしまった患者さんとの関わり方がわからなくなることもありました。そんな時疲れて寮に帰っても暖かいご飯がない事。いつもそばにいて話を聞いてくれたり、相談に乗って励ましてくれたりする人がない毎日は、とても辛かったです。それまで学校は楽しくて早く友達に会いたくてたまらなかつた私が、学校に行きたくない、休みたいと思うこともありました。

それでもここまで乗り越えられたのは、28期

生の仲間と支え合い、励ましあってきたからです。みんな自分のことで精一杯な時でも、声を掛け合い頑張ってきました。私も頑張っている仲間を見る度に、「自分だけじゃない。みんなも同じだ。だからもう少しやってみよう。」と何度も支えられてきました。こんな思いを皆に伝える機会がありませんでしたが、「28期生と一緒にここまでやってこられてよかった。本当にありがとうございます。」と言いたいです。また、私が辛い時や苦しい時、さりげなくそばにいてくれ、黙って話を聞いてくれる、時には一緒に笑い飛ばしてくれる、そんなことが当たり前のようにできる親友に感謝してもしきれません。先生方からは、私が浮かない顔で歩いていると声をかけて頂

き、勉強や学生生活、実習のことなどたくさん相談に乗って頂きました。その中で頂いた言葉が悩んでいた私の支えとなり、乗り越えることができました。そしていつでも味方になって支えてくれたのは家族です。寮に入り、家族のありがたみや大切さを改めて気づかされました。家は、暖かい空間、おいしいご飯があり、私がお悩んでいることを察し、話を聞いてくれました。人生の先輩としてアドバイスをくれ、私が間違っているときは、はっきり教えてくれました。携帯に届く何気ないメッセージにも何度も支えられました。どんな時も支えてくれた家族へも感謝の思いでいっぱいです。

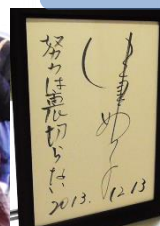
私は、この三年間を多くの人の支えにより乗り

り越えることができました。感謝の気持ちを伝え、私の宝物として大切にしていきたいです。そして、これからは支えられてばかりでなく、私が多くの人を支えられる人間になりたいです。そのためにも残りの学生生活を、社会人となる事を意識し、行動していこうと思います。残されている国家試験には合格を目指して全力で臨みます。

☆2014年2月18日 28期生 1年生☆



☆2015年4月10日 28期生 2年生☆



☆2017年2月21日 28期生 3年生☆

